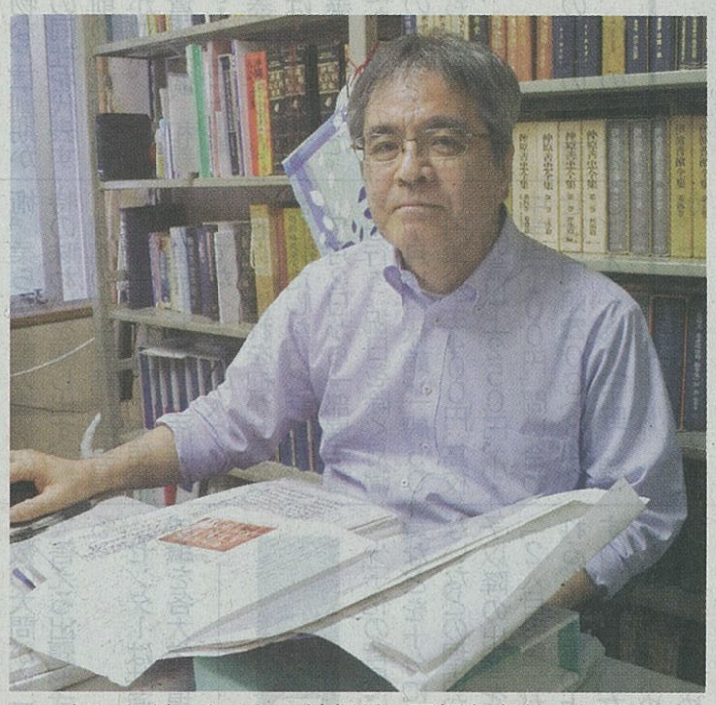
時代の正体 沖縄考

主権奪われ続けている

「琉球処分」から140年

明治政府が琉球国の王権を簒奪（さんだつ）し、沖縄県を設置した「琉球処分」から、今年で140年を迎えた。明治日本は抵抗する琉球人を力で抑え込み、のみ込んだ。それから月日がたち、かの沖縄では米軍普天間飛行場（同県宜野湾市）の名護市辺野古移設に反対する民意が公然と無視され続けている。「沖縄は、今も主権が奪われ続けている」。神奈川大の後田多敦准教授は指摘する。現状は「琉球処分」と陸続きなのだという。

（柏尾　安希子）



しいただ・あつし　沖縄県・石垣島出身。専門は琉球史、日本近代史。著書は「琉球救国運動―抗日の思想と行動」（出版舎Mugen、2010年）、「救国と真世―琉球・沖縄・海邦の史志」（琉球館、19年）など。

神奈川大　後田多敦　准教授

―「琉球処分」とは何か。

「1879年に明治政府が沖縄県を設置するにあたり、それ以前にあった琉球国を日本に取り込んでいく過程のことをいう。『琉球処分』とは明治政府の言葉であり、プロジェクト名だ」

―日本と琉球国はどういう関係だったのか。

「1609年、島津（薩摩藩）が琉球国を侵略し実効支配に置いた。その後、明治政府が王政復古で始まり、版籍奉還が行われた。土地と人民を（朝廷に）返したのだが、もともと琉球は天皇のものではなかったため薩摩は琉球を返還しなかった。このため明治政府は1872年、新政府を祝う維新慶賀の名目で琉球の使節を東京に呼び、送り込まれた使節団に琉球国王尚泰（しょうたい）を『琉球藩王』にするという任命書を渡した。国王のおじなどで構成された使節団は外交権限がなく断ったが、結局押し切られてしまった。そのときに初めて明治政府と琉球の関係ができた。すなわち天皇と琉球国王が君臣関係となったのだ」

―沖縄県を設置した過程は。

「琉球国は中国と冊封関係（名目的な君臣関係を伴う外交関係）にあり、明や清と500年近く交易し、米国やフランスとも条約を結ぶ国家だった。そこで明治政府は琉球の外交権を奪い、清国との関係を絶とうとした。その後も君臣関係を根拠に警察権、司法権を少しずつ奪っていく。ただ、琉球側は抵抗し、膨大な人が清国などに亡命した。79年、明治政府は兵とともに内務官僚の松田道之を『処分官』として琉球に派遣して首里城を接収し、王を東京に連行した。そして廃藩置県を行い、沖縄県を置いた」

―「琉球藩王」に命じた背景は。

「使節団を事実上、軟禁状態に置き、説得して押しつけた関係について、明治政府は『冊封』と表現した。世界が見ていたため、なんらかの形は作らなければならなかったということだ。その後、首里城接収のために軍隊を送る際も、東京でなく九州からひそかに送ったぐらいだ」

「君臣関係は名目であり、取り込むためのプロセスだった。『琉球処分』に対しては『あいまいだった国境を画定した』という認識も存在するが、王権があった国家に対して条約も結ばず『処分』したことは、つまり一国をつぶしたということ。だが、たとえばアイヌ民族が『日本人だから』北海道は日本のものとされ、長い間先住民と認めなかったような論理が、琉球人についてもとられている。そういう見方も含め、日本のゆがんだ近代、現代がある」

―薩摩との関係があったから、琉球は天皇の臣下とされたのか。

「薩摩の実効支配を受けていた段階で琉球は日本のものになっていた、という理屈があるが違う。明治政府は、琉球は『日（薩摩）清両属』と言ったが、清との冊封関係は合意だった。清国は遠い小国である琉球におおらかに接し、交易を許し、琉球からの使節を歓待するなど、琉球国にはメリットしかなかった。一方、軍事的に侵攻した薩摩は琉球を属国とし、収奪し続けた。そして、それはあくまでも島津との関係であって天皇とは関係ない。その点は明治政府も分かっていたため、強引に君臣関係をつくったのだ」

―「琉球処分」の狙いは。

「明治政府による台湾出兵（74年）や、朝鮮と国交をめぐって衝突した江華島事件（75年）とほぼ同時並行で行われた。清の冊封体制の序列1位だった朝鮮と2位だった琉球を切れば清は裸になるだろうと、そうした意味があった。それはやがて日清戦争につながる。（征韓派が敗れた）明治6（74）年の政変後、早い段階から日本は侵略国家に軸足を移しつつあったのだと思う。『琉球処分』については明らかに主権の簒奪であり、侵略といっていい」

「琉球国を版図に編入したのは、東アジアの関係を考える際にそこを確保することに意味があったということだろう。琉球周辺の海は資源の通り道であり、琉球が本気で船を通さない対応をとれば、干上がってしまう。日本はそうした場所をとる意味を自覚していた。日本が国として成り立つために必要だったと考えたのだ」

―それから140年が経過した。

「台湾や香港など、日本が奪ってきた土地は返還されてきたが、まだ返されていないのが琉球だ。沖縄は唯一の地上戦の舞台となり、現在、宮古島など南西諸島への自衛隊配備が強行されようとしている。たとえば辺野古の問題も、県民投票までして反対の声を上げても通らない。主権を奪った場所であり、日本にとって声を聞く必要がないのだ。沖縄県民は同じ国民でないか、ランクが低い国民ということだ。琉球は、主権が奪われている状態が今も続いているといえる。そして日本は、そのことについて気付かせないようにしている」

―主権が奪われ続けているとは衝撃だ。

「『琉球処分』の意味は、琉球に決定権がないということ。それを奪ったということだ。だから県民投票をしても認められることはない。以降、沖縄の意思が通ったことはない。通ったとすれば、それは沖縄の意思ではなく、日本に意味があったからだ。歴史資料を見ると、琉球の人は昔から正論を語り、日本政府を説得しようとしてきた。だが、そういうものではないのだ。政府は沖縄の思いを理解していないのではなく、言っていることが正しくてもやるのだから。そうした資料を見ると、国が滅ぶことは悲しいことだとつくづく思う」

―沖縄県民の意思が通る日は来ると思うか。

「たとえば辺野古への移設が止まるとしても、それは日本にとって意味がないからでしかないだろう。主権が回復しない限り、意見は通らないと思う。それは日本の中にいるのであれば、きちんとした国民として認められるということだが、多分、そういう日は来ないだろう。日本にもっと余力があったときはよかったかもしれないが、日本自体が衰退して階層化が始まっている。だから難しいのではないかと思っている」

「現状を許しているのは主権者である日本国民。熱く語ればそういうことになる。ただ、日本政府の政策の動かし方をみると、沖縄の主権が失われていることが分かっていながら、国民にそれを気付かせないようにしている」